

ニュージーランド研究に導いてくれた古典

——生江孝之著『新しい国 新西蘭と濠洲』——

小 松 隆 二

「高度に社会保障の進んだ国は？」と問われて、私がすぐに想起するのはスウェーデンやイギリスではなく、ニュージーランドである。それに対応するように、社会保障や社会福祉に関する文献で心に残る書といえば、まず生江孝之著『新しき国 新西蘭と濠洲』（新生堂、1929年）が浮かんでくる。ニュージーランドとオーストラリアの2国を取り上げてはいるが、ニュージーランドに質量ともに比重の置かれた著作である。

ニュージーランドに魅せられるに至った人たちは、その契機としてしばしばこの生江の著書か、川瀬勇著『南の理想郷・ニュージーランド』（養賢堂、1941年）のどちらかを挙げる。私のニュージーランドとその社会保障・社会福祉に対する関心は、生江の著書によって深められた。生江は「世界の理想郷」あるいは「貧富の懸隔が大いに緩和され且つ理論上一人の社会貧なき国であつて現代の理想郷」（同書、3頁）などとニュージーランドへの賛辞を惜しまないが、その思いが満川亀太郎や川瀬以下多くの人に引き継がれる。

大正デモクラシー下に始まる社会事業とそれに続く時代に、その民衆化に腐心した生江は、欧州から帰る船中で1ニュージーランド人に同国の社会的施策のすばらしさを吹聴された。旅とともに自分の生涯はあったと回顧する生江は、それ以来同国を訪う夢を抱き続けた。それが実現するのは、それから数年してからであった。「秋は来た、其の憧憬れを充すべき秋は来た、それは大正14年の初夏」（同書、序1頁）のことであった。ニュージーランドの1925年といえば、コーツ内閣によって児童福祉法や家族（児童）手当法が導入される前後で、まだ先駆的な社会的実験を継続する時代であった。国民が塗炭の苦しみに喘ぐ世界恐慌の襲来、そして社会保障法や「揺籠から墓場まで」の高度福祉国家の誕生にはまだ時間があった。

ニュージーランド現地での見聞は、彼の長年の期待と夢を裏切らなかった。ニュージーランドへの憧憬は増すばかりで、帰国後さらに3年以上の歳月をかけて研究、その成果を『新しき国 新西蘭と濠洲』にまとめた。日本人の手になるものとしてはニュージーランド社会に初めて本格的に取り組んだ総合的な研究書となった。

同書は、社会福祉では児童福祉に高い評価を与えている。その他土地、産業、労働、生活、宗教、教育、さらにマオリ、高齢者、女性等にも触れ、ニュージーランドの社会的側面を浮き彫りにしている。当然世界に先駆した女性参政権、最低賃金制にも触れている。

ただ彼が見聞したのが1925年ということもあり、児童福祉法や家族（児童）手当法には言及がない。1908年の児童法にも言及がない。また女性参政権の獲得年次などの誤記、時には説明の不的確さもみられる。しかし、そういった注文も比較的條件の整った今だから言えることで、他の西欧諸国に比べてニュージーランドの文献・資料は現在でもなお入手しにくいのに、会話、交通・運輸・通信などに大きな困難のあった当時、生江の記述にみられるバランス、深さ、正確さの限界には寛大でなくてはならない。むしろ時代的制約を超えてニュージーランド社会を総合的に取り上げた彼の著作の先駆性こそ高く評価されなくてはならないであろう。

私がどうして同書を読むことになったのかは定かには記憶していない。安部磯雄、片山潜ら日本の初期社会主義者が世紀の転換前後に理想国や社会主義国として憧れた国という認識と、社会福祉の先駆者生江孝之が憧れた国という認識が、ほぼ同時に私の脳裡に入り込んできたように記憶している。

生江の著書によって膨らまされたニュージーランドを訪う私の希望が実現するのは、1981年になってからである。滞在先は南のクライストチャーチ。社会保障研究の大家ブライアン・イーストン教授が私の身元引受人で、その紹介の労をとってくれたのは、社会学者で日本研究者でもあるロブ・スティーヴン教授であった。もっともイーストン教授は私と入れ代わりに、ウェリントンに移籍したため、直接指導を受ける機会はもてずに終わるのだが。

それ以来十有余年。私の研究生活の中でニュージーランドはきわめて大きな位置を占めつづけるのである。

（こまつ・りゅうじ 慶応義塾大学教授）